明治二十一年一月十四日刊行

毎月一回發行
壹冊正價廿錢
全國無郵送税

通信女學講義録

第八卷

女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

陳言

通信女學講義錄の儀近來編者の一身彌多忙を極め候爲に編輯上遺憾と存じ候點も少からず先づ愛讀を辱ふする諸君に對して面目無之は勿論元來本紙を編輯して少さか女學の爲めに盡力可仕素志にも相違するとに付次號よりは補助編輯者を增加し友人間に就て講義筆記を請ひ可成く紙數を增し教科を多く仕度存候依て來二月出版の分よりは必らず多少改正の廉を御覽に入るべく候也

因に云ふ本紙編輯上の事に付種々教示を寄せられたる諸氏に謝す尙は不相變万事御指示の程希上候

來二月發行の分は乍遺憾月末に至つて出版可仕都合と可相成候但し其後は切度每月十五日前に配布可致候

明治二十一年一月　通信女學講義錄　編者

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

イスター、デ、ホウシの像

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

表に掲げたるは米國婦人禁酒會の出版局長兼バーモント州禁酒會の會長にして且つ同州ブラットルボロー府の女學雜誌(セ、ウーマンス、マガジン)の記者たるイスターデ、ホウシュ夫人の肖像なり此頃の米國シカゴ府發兌のジ、ユニヲン、シグナル雜誌中に會頭ウィルラルド孃が同婦人の事を傳へたるものありて云く

夫人は專ら生民の進歩に精神を竭し第一基督教を敬信し深く人民の智識を開かんとを切望し男女小兒をして各自其技倆を顯はし神の大權大能を世に達せしめんとを目的とし專ら廣く出板の事業を擴張し其營業は疾くに衆民の心底に達せり夫人は幼年の頃より非常に諸人の愛を受られたるが之れ實に天賦の生質ありと雖も亦自ら其眞心之を好むに因るとならん夫人の言に「假令落天の日に逢ふと雖も余は公道を以て天地に報ゆ」と斯の如き精神なるが故に唯英佛獨の諸學に止まらす羅甸希臘の諸學をも明にし博學多才の名を以て世に知られたるのみならず性頗る活潑にして是非を斷する恰も雷光の如く人をして夫人を禁酒會の燈臺なりと評するに至らしめたるも宜なり云云

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

中二段の活用
中二段の將然言
同く連用言
同く終止言
同く連體言

○文學一斑（第八回）

語格（其四）

第三　中二段の活用　中二段といふハ五十音の中にはさまりたるき。ち。ひ。み。い。り。（第二段の音）く。つ。ふ。む。ゆ。る。（第三段の音）の音にて活用をなすが故の稱なり　其第一階將然言ハおきおちこひうらみおいふり等にして承るテニヲハは四段并びに一段の丶と同じ（用言活用圖を見合すべしテニヲハの意解ハ四段一段の將然言の條を見よ）其第二階連用言も一階と同じくき。ち。ひ。み。い。り。なり。亦そのテニヲハも四段一段の連用言を承る助詞と異ならず　其第三階終止言ハおくおつこふうらむおゆふる等にして之を承るテニヲハは四段、一段の終止言の丶と同じ　其第四階連

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

同く既然言　下二段の活用　同く将然言　同く連用言　同く終止言　同く連躰言

躰言ハく。つ。ふ。む。ゆ。る。にるをそへておくる。おつる。こふる。うらむる。おゆる。ふるる。と活らき承るテニヲハは矢張四段一段の連躰言のヽと異なることなし　其第五階既然言ハおくれ。おつれ。こふれ。うらむれ。おゆれ。ふるれ。とやうにれをそへていふなり。承る助詞ハ他の既然言とおなじ　二

第四　下二段

下二段といふハ五十音の行の下に位せる第四段のえ。け。せ。て。ね。へ。め。𛀁。れ。ゑ。と第三段のう。く。す。つ。ぬ。ふ。む。ゆ。る。う。とにて活用をなすが故の稱なり　其第一階将然言ハえ。け。せ。て。ね。へ。め。𛀁。れ。ゑ。にして其第二階連用言も亦おなじ。其第三階終止言ハう。く。す。つ。ぬ。ふ。む。ゆ。る。う。にて活らき。第四階連躰言ハう。く。す。つ。ぬ。ふ。む。ゆ。る。う。にるを

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

同く既然言

加行變格

そへ。第五階既然言ハ之にれ。をそへて活用をなすなり。何の階も承るテニヲハは四段、一段、中二段と異なることなし

前なる四段の活用、一段の活用の條にくはしく述たれバ此にハくど〳〵しくいいはざれど用言活用圖を見合せつゝ四段、一段の活用を述たる條々を熟讀せバ推て明かに知るべし

第五　加行變格

加行變格といふハ前なる四段、一段、中二段などの加行と活用の狀かはりて此なるハ第五の音、第二の音、第三の音にてこ。（將然）き。（連用）く。（終止）くる（連體）くれ（既然）をなし唯くる（來）といふ言のみの活らきなれバ變格とハいへるなり

諸〳〵の活言の中にて第五の音に活らくハ是のみ也

この活らきハ中二段に似たれども大に異にして他の例に準ずれバし。しかの助詞へ接くハ連用言のき。より接くべきを古へより多くは將然言のこ。より接きて來し、來しかといへり。但し來し。來しかと

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

用ゐたるも稀に見ゆれど此ハ後世の用ゐざまにして中世までハ來し方ゆく末などいへる外にハ見えざるなり。又き。しかと接く處よりハ過去の助詞なるき。へもつゞくべきを此にてハ將然のこ。よりも連用のき。よりも接くことなし。又な。云々く。そ。といふ言ハ凡て連用言より勿おもひそ、勿こひそ、勿とがめそ、とやうにいへるを此の活らきハな來そといひて將然言よりそ。に續くるなり。又將然言の。（連躰言にるをそへ既然言に）こ。を使令言とせり。是みな變格の故と知るべし

れ。をそふることと幷に右に述たることの他ハ第五階の活用および其階ごとに承る助詞等は前の活用と異なることなし圖を見て辨ふべし

第六　佐行變格　佐行變格といふハ是亦ほかの佐行の活用と變りてせ。き。す。するすれとやうに第四の音、第二の音、

四

第三の音にて活用をなしする(爲)おはする(御座する)の他に活らかざるが故の稱之。もろ〳〵の活用言の例にておさバ連用言の過去のテニヲハなるしを承て爲し。といふべきを然はいはず將然言のせ。より續きて爲じ。とのみいへり。さて爲し。と活らく例に準ずれバき。の助詞へもつゞきて爲き。といふべき筈なるに此ハ又はかの例のごとく連用言のし。より續けて爲き。とのみいへり。此等ハ即ち變格の變格たる所以なり。此の活らきも勿云々そ。といふ條ハ加行變格と同じく將然言よりそ。へ續けてな。爲そ。といへり。又この活言のするといふ言ハ形狀言ハ形狀言のまゝに承て能する、悲しくする等いへと用言をうくるとき

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ハ其用言ハ即ち體言なるなり。釣する、戀する、消する、などのごとし（第二階の連用言ハいひすられバ躰言ともなるなり。講義錄第五卷八葉躰言の係を見よ）

第七　奈行變格

奈行變格とハ奈行第一の音、第二の音、第三の音、第四の音にてな。に。ぬ。ぬるぬれね。と活らきいぬるしぬるの二つの言のほかハ活らかざるをいふ（ある說に死ぬるはすぎいぬるの約まりたるなりといへり。然ばこゝの活らきハ唯だ徃るの一言のみなり或說にハ死ぬるハ息いぬるなりともいへり。何れを是とするも徃ぬるの一言なり）扨第二階の連用言を承る助詞のなん及びなばに。ぬ。ぬるぬれ等ハこゝの活用に用ゐるとなし。そは此等の助詞ハ原こゝの活用言より轉て成る者なれバ也（後世の書どもに死にゝけりといへる言も見えたれど古きものにハ見えず將然言の助詞なるなんは願ひの意にして連用言のなんとハ異なり。此ことハ前に屢いへり）第五階のぬれは既然言にてこその係辭の結ともなりば。ど。どもの助詞を受て下へも

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

奈行變格の使令言

良行四段一格

續くること他の既然言と異なることなし。又第五階にね。を加へ往ね死ね。といひて使令言に用ゐる。されど此ね。ハ結詞ともならず助詞を以て下へも續かず使令言の外ハ用ゐることなし。然るに初學の徒やゝもすれバ死ねバ死ねどもなどいふめれど、専るの俗言なり。又しぬるまでといふべきを死ぬまで、死ぬることを死ぬことなどいへるも誤りなり。までハ第四階連躰言を承る助詞と知るべし

第八 良行四段一格

こゝなる活らきハら。り。り。る。れ。と良行第一の音、第二の音、第三の音、第四の音の四段に活らけど第一の四段の活用とハ小しく異なるを以て四段一格とゝなふるなり。第一なる四段の活らきハ第三の音る。を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

以て終止言とすれど此にては第二の音りを以て終止言となし承る助詞もかなとともを用ゐるなり。この例をもて推バらんらしべしめりまじな等の助詞へも接くべきなれど此等の助詞へハ接くとなし（普通の例にてハ終止言の助詞ハらん、らし、べし、めり、あり、まし、な、ばかり、かし、と、とも等なり。然るに此なる亘行四段一格の終止言の助詞ハたゝかしとともの三つのみあり）斯てらんらしべしめりまじな等の終止言の助詞ハ第四階連躰言のる。（亘行第三の音）より接なり。此の活きにてハにをよりまでかななりばかり等の通例の連躰言のテニヲハにも亦おなじく接なり（用言活用圖の第八亘行四段一格の條を參見すべし）此の活らきの言ハある(有)をる(居)ハべる(侍)いますがる(在すがる)等なり。第一階のあるといふ言も佐行變格のするといふ言のごとく形狀言よりは緩くあ

八

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第二音のりを終止言とせし例

る、緊しくあるなど、形狀言のまゝにて接けども用言より續くればその用言は即ち躰言なるなり。思ひある譽れある等のごとき是なり（源氏桐壺の卷に「ときめき給ふありけり」といへるは給ふてふ用言よりありへ直ちに接けるが如くなれども此は給ふの下に人といふ躰言の言を含めるにて「ときめき給ふ人ありけりといふことなり。給ふは連用言ならずして連躰言なるにても知るべきなり。凡て連躰言よりあるへつゞけたるは必ずその間に體言の言を含めり）偖をりを以て終止言とせる例をあげば古今集誹諧に「胸はしり火に心やけをり」又「はべり」を以て終止言とせるを例せば枕草子に「己がもとに琴はべり」などいへるが如し。其餘みな斯のごとくなれば第二の音のりを終止言とすべし。をるはべる等の第三の音るを以て終止言とすべからず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○正誤　第七號二頁二行細註願ノ傍訓ねがい゜ハねがひ゜ノ誤○同三頁七行細註故ノ傍訓ゆへ゜ハゆゑ゜ノ誤○同四頁八行細註多ノ傍訓おう゜ハおほ゜ノ誤○同五頁七行十ノ假字えゆ゜う゜ハえふ゜ノ誤幷ニ八行ハ七行ノ五十ノ下ニ續ク八行初ノ音ノ假字い゜んハおん゜ノ誤○同六頁四行居ノ傍訓い゜ハゐ゜ノ誤○同七頁十行細註おもへかしノヘトかトノ間ニアル小圏ハ誤入○同七頁十行中ノ傍訓ち゜う゜ハな゜か゜ノ誤同ク下ノ傍訓しさ゜ハしも゜ノ誤同行ノ假字ぎ゜ようハぎや゜うノ誤○九頁九行故ノ訓傍ゆへ゜ハゆゑ゜ノ誤

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

子供を眠らす寢室の事

○育兒心得（第八回）

問。子供を眠らする寢室の事を、最初に伺ひたく候。

答。之には別段に異りたる申條も無之候が、常もながら、空氣の流通を宜しくするは、尤も大切なることにて候、而して、他に一つ申置たきは、子供は、餘程温かにせでは成らぬと思ふものと、又た一方には、子供は風の子なりと云ひて、徒らに之を冷氣にあつると、共に極端に走りたる、二つの謬まりあることなり、之は何れも宜しからぬ考へにて、子供を別段に斯く温かにするか、又は、寒くするの必要なきものと思はるゝに付き、矢張り、何事も尋常にするがよろしからん、即はち、寢室は、常に華氏の六十度位に致し置きて、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

子供を獨りにて寝かす事

くれ〴〵も、空氣の通よひを好くすべき也。

問。日本流にては、子供を始終抱いて寝るとに候が、西洋にては、最初より之を獨りで寝かすとか承はり候、何如にせは宜しかるべく候や。

答。扨て、此の事に候、我國にては、母がいつも〱、之を抱いて寝るの習はせにて候より、遂には、母と共ならずバ寝つかざるようにに相成り、餘程大きくなりても、未だ母を頼むの習慣を去らざるものに候、之は、母親一身の都合の上より申しても、甚だ煩はしき者に候が、事の害は、之れのみならず、其子供の身の上より云ひても、健康上宜しからぬものと思はれ候。ゆえに成べくは、獨りにて寝つくような

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

眠りたる子供の顔を被う事

る習慣をつけ、夜る定まりたる時間來らば、自から安んじて獨り寢つくやうなる仕來りにするが、大切ならんと存ず。尤も生れたるより二三ヶ月の内は、母の躰温にて温ためて遣るとも、必要なれバ、極々の赤子は、無論抱いて寢るを良しとす、但だ、夫より後の子供の事に付てハ、上に申す趣を、好く／＼御心得ありたきと也。

問。子供を寢付たる後ち、ハンケチなどを其頭もしくは顔のあたりへ、覆ひ、第一に、日光の見へぬようにし、夏ならバ、以て蝿のうるさきを防ぐなどの事有之候、右は別に差支へのなきとに候や。

答。之は、甚だ宜しからぬ事に候、すべて、眠りたる間は、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

眠りたる間だ子供の衣物の事

特更らに、空氣を清潔にするように心附ねバ相成らぬ所を、顔のあたりに覆ひものなどをして、一旦吐出したる息氣を、復び吸ふように取計ふは、くれ〲も宜しからぬと考へらる、彼の蠅を防ぐとなどは、薄きかはおはひの衣の如きものを掛て置てもよろし、ハンケチなどは、夢々御つゝしみありたきもの也。

問。子供を眠らする間は、着物のことにつき、何か心得べき箇條有之候や。

答。すべて、衣物は、成べく、自由にあるように着さすべし、眠りたる間だに、窮屈にありては、切角安眠したる効能も之れ無ことに候。次には、起て居るときよりも、少し温になす

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

子供の能く眠る事

膝の上に寢かす事

べし、之は、眠りたる間は、躰温少しく低うなる故にて、寢たる間だに、風を引きやすきはどのことゆへ、子供を寢かすときは、第一に着物をゆるやかに着せ、且つ、稍や温かになるよう取計ふべし。

問。子供の能く眠るは、喜ぶべきことに候や。

答。甚だ喜ぶべき兆候にて候、吾人の存ずる所ろにても、元來弱き子供が、甚はだ好く眠るために、遂に丈夫と成りたるあり、又た、元とは、中々健康と見へたるが、平常眠ることの少なきより、遂に、大に衰弱して、死したるを見受けたり、故に、能く眠るは、實に喜ぶべき兆候と思はれ候。

因みに申置くべきは、姆などが、子供を膝の上などに載

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

せて、寝かすときは、段々と其習慣と相成り、遂には、獨りにて下には寝ざる程にも立至るものに候、而して、膝の上などに眠るは、平らなる下に寝るよりも、反つて健康に悪しきとゆゑ、平生成べく斯るクセを附けぬようにして、常も下に伏せしむるようにすべし。

子供の眠らざる時の事

問。能く眠るとは、斯程にも大切なるものと承はり候、上は、若しも子供が甚いだ眠り申さゞるときは、何か薬にても與へ申すべきや、伺ひ置たく候。

答。否な、輕々しく薬を與ふるは、宜しからず候、勿論能く眠られぬは、其躰だに何か申分のあるとに候へば、兎も角醫師に見せて、其診察注意を乞ふとは、宜しき御處置なり

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

と存ず。但し、多くは、通ドの惡しきより、眠の隨つて六かしくなるものゆへ、先づ此の一事に注意して、子供の糞の色は、何如に、其香ひは、何如に、など、吟味しをきて、後ち醫師に其由を申すべきことなり。

子供が夜間頓死する事

問。眠りたる間だに、突然子供の死すると往々にして之れ有り候、實に驚くべきことにて、左樣多くは聞き及バざれど、隨分耳にしたることも御座候、之は、何如なるゆえにて候、伺ひ置たく候。

答。之れ多くは、子供の息氣を塞ぐゆゑにて候、其外に、左樣に、急に突然として死するは甚ハだ少なきものに候、彼の不注意なる母親、又は、姆が、乳房を含ませ乍ら、我知らず

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

眠りて、其儘子供の口を塞ぐか、又は、睡眠中殊の外の行儀にて、手を廣ろげ、肩を押し付けなどして、之れ亦た思はず子供の鼻もしくは口の上を覆ひ、其の息氣を止むるとあり、之によりて、翌朝目さめたるとき、既に其子の死したるを認むる如きことは、新聞紙上にも、度々見ゆる所に候、必竟は、母、又は姆の不注意より起ることゝ申せ、何處の親御方も皆な之に心付けて、斯るあやまちのなきよう、兼々用心ありたきことなり、因りて、今ま、斯樣なる怪我のなき樣常々の心得とすべき箇條少々を擧んに、

凡そ、子供を眠らする寢室は、廣ろきを要する事。

母親、若くは、姆は、子供と餘り接近して眠るべからず、若

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

し止を得ずば、子供の顔をアチラへ向け、背合せにて眠るようにすべき事。

而して、亦た、子供の口のあたりに、夜着の覆はりておきや、否やに注意すべき事。

子供の頭を置くべき枕の外には、別に一つの枕をも其近くに置くべからず、之は、万一にも子供が其顔もしくは頭を、此の別の枕の下に容るゝようのとおからん爲めにて、凡そ、介弱き子供のとおれは、一旦かゝる危難に出會しときは、中々自力にて之より免るゝとあたはざる由を、呉々も承知すべき事。

夜間は、凡そ、不注意がちの婢に、子供を托すべからざる

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

事

子供の通じの事

問。子供の睡眠の事につきては、色々と承はり、有がたく候、次に、御約束に隨ひ、病氣の事を、承知仕り度候。

答。子供の病氣の中ち、第一に心得べきは、其通じの事にて候、特に、生れてより三ヶ月が程は、母たるもの、常に其糞の樣子を考へ、色は、黃ろくして、殆んど橙色の如く爲るや否や質は軟らかにして、粥の如くなるや否やと注意すべし、斯の如きは、即ハち、健全なる子供に無くてならぬとなれども、若し、糞の色青みを帶ぶるか、土の如くなるか、軟らかさも亦た前に申す如くならずバ、之れ即ハち母の食物の宜しからぬ證據なり、先づ母よりして養生すべき筈な

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

子供の氣管のサハりの事

らん。又た子供の小便ハ、餘りニホヒのせぬがよろし、之を布に染めて、餘り色のつかぬが宜ろし。

問。赤子には、生るゝと、其儘、氣管に何かさゝわりが出來たるようなる風にて、聲のかゝると有之、右は、何如なる故にて、且つ何如に取計らひ申すべき乎。

答。之は、膜が出來たるには候へども、別段心配するに及ばず、一回通じありたるのちは、大方は、直はり申すべし、尚は、此折、口中に之と同樣の膜のごときものありたらバ、之を軟らかなるハシケチにて拭ひ取るべし。

問。赤子に生れたる后ち、直ちに藥を飲ませて、通ドを附くると有之、右は宜しく候や。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

通じ藥を赤子に用ゆる事

答。　之は、必要ならぬのみか、反つて、害ありと覺へ候、矢張り、生の母の飲ます最初の乳の中には、十分の効能ある藥の如き成分を含み居ればﾞ、別に之を與ふるにハ及ばざるべし、然れど、ロツコツク氏の云へりし如く、乳を飲ませがたくして、牛乳などにて育つべき赤子、又は、姆の乳にて育つべき程のものには、先づ通じ藥を與ふるを宜しとす。

三三

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

手足の痛む事

○女子生理（第八回）

第二章　懐姙の事　（其六）

扨て、又姙婦は、手足の筋肉時々大に痛みを起し、夜分も快よく寢ねがたく、甚だ困難するとあり、之は、別段危篤なる病ひにてはあらざれども、何分にも、心持の非常の惡しきものなれば、速に用心して、之を治療せでは相成るべからず。　元來、之は、血液が常を失して、熱したるか、又は、神經が、或る局部に於て何かの刺劇を受けたるに因るものなれば、其治療の方は、別に之と云ふ藥もあるべからず、先づ窓あり、入口もありて、空氣の流通よろしき部屋にて眠るととし、且つ、下に厚く布團を敷きて、上に薄く掛け、朝たに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は冷水を以て能く身躰を洗ひ拭ひ、又た、少しく運動を爲し、油とからぬ滋養食を食べて、成べく粉類の品を用ひず、茶も餘り濃きを飲まず、コッフヒーは、勿論之を止めにし、而して、

ラベンドル油精一ドラチム、及び、揮發アムモニア精十一ドラチム

を調合し、之を毎夜床に入る前に、匕に一杯づゝ、服用すべし、尚は、又た必用とあらば、眞夜中比ろ、水をコップ一杯入れて、其中へ前ほどの分量を落し、之を飲むべし。尚は、夜間此の病ひ起りて、眠られざるときは、靜かに起き出で、、部屋の邊りを彼此と歩み廻り、水少々を飲み、枕を反へし、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

酸敗液を起せし折の事

冷やゝかなる方に頭を當てゝ眠りを試むべし。若し、又晝の間だに、此の苦しみあらば、車に乘じて、出で歩るくか、又は、近邊を散歩すべし、一躰日々の仕事に精出して、多忙なるほどの婦人には、斯る患ひの少なきものにて、何事もせず、働らきの少なき女の方にのみ、多き病ひなれば、呉々も身を動かして、散歩運動などを爲さるゝ事專一の心得なるべし。

又た、妊婦は、時々大ひなる心得違ひをして、胃を痛むるとあり、蓋し、其人々の考へには、既に胎内に一人の人間を持ちたれば、先づ二人前の養ひを取らずしては、後日のほどの覺束なしとて、扨ては、無理に多く食べて、好まざる分量

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

をも強いて取らるゝやの誤まりあり、眞に愚らしきとにて、之より胃の消化惡しくなりて、即はち、酸敗を起し、當人の身の上にも、又た胎内の子供にまでも、其害を及すとわり、尤も謹しむべき所なり、一躰、油づよきもの及び、不潔なるものは、姙婦の決して食用すべからざるものなれども、此際には、特に注意して、決して斯る類の品を取る可らず、而して、マグチシア、又たは、炭酸曹達を、温湯コップ一杯に混じて、時々飲用すべし、尤も、通じの宜しからぬ折などは、マグチシアの方を撰び用ゆるを、更らに可なりと爲す。斯くしても、未だ治まらざるときは、前にも申したる食物の品に付ては、一層嚴しく注意する上に、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

腸胃に風氣の出來る事

三炭酸安謨尼亞　半ドラチム
重炭酸曹達　一ドラチム半
水　八オンス

右三品を調合して、匕二杯宛を、一日に二三度づゝ服すべし、此折にチヨルク(白堊)を用ゆるものもあれども、之にては反つて通じを惡しくするの患ひあるなり。

又た、姙婦は、胃もしくは腸に、風氣を生じて、大に不快を覺へ、夜間に眠り得がたきとあり、之は、其元因甚ハだ明らかにして、全く運動の足らざるゆえか、又は、夜る眠る前に、食物を取るかの二つに由るとなり、左れば、斯るときにて、醫者を煩ハす迄もなし、若し自から注意して、少し運動するか、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

痔の事

食物を節すれば、夫にて宜ろし、普通明白の規則を破りて、爲めに身躰を害するものは、實に尤も憫れむべきものなりけり。

又た、姙婦は、痔を患ふると度々あり、之は、痛みの起りたる前後に、

竜脳を酒精にて溶きたるもの　一ドラチム

精製軟脂　二ヲンス

右二品を調合したるものを塗るべし。若し、非常に痛むときは、極めて熱き湯を、何かの箱に入れて、其上に腰かけ、十五分乃至二十分間温ためて、後ち直樣パンに乳を混合せたる糊ようの者を塗るべし、毎日五六度も如此く療治す

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れば、大に忍び易く爲るべし。尚は、又た、餘り激しからぬ時には、

阿片粉　三分半
酒精にて溶たる龍腦　半ドラチム
五倍子粉　一ドラチム
鯨腦油　三ドラチム

右四品を調合して、毎日三度づゝ塗るべし。而して、此と同時に、通じを能くするが、一つの大切なる治療なれば、前にも申したる、色々の法に從つて、能き通じを爲すべし。又た、痔の起りたる時には、淡泊にして然も養ひ多き食物を、食し、決して、刺劇性の品を用ゆべからず、凡そ、血液を激する

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

足の膨るゝ事

ようなる食物は、即ハち、痔に取つても、又た害あるものなり。

又た、妊婦は、足、殊の外か膨れて、歩行しがたきに至るもあり、之は、子宮大きくなるに隨つて、其上の血管を壓迫し、爲めに、足の邊の血管を廣ろぐるに由つて起るものなり晩年に至りて婚姻したる婦人、及び、子宮の少し下に在る婦人などには、特に此の病多し、足の痛み甚ハだしくして、大に困苦するとなり。治療法は、絹にて、足袋を製し、下に紗をまとひて、其上より此の足袋を穿つ様にすべし、而して、紗を時々洗濯し、決して不潔にすべからず。但し痛み甚はだしければ、速やかに醫者の診察を乞ひ、十分なる手當を爲

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

下腹の皮の痛む事

歯痛みの事

すを宜ろしとす。
又た、姙婦は、下腹の皮が張つて痛みを覺へ、大に困難するとあり、之には、朝夕龍腦油を塗り、フランネルの帶を以て、程能く縛バり、尚は腹に落付てあるよう、帶を肩より弔るし置くべし。但し、腹の皮かように引張るのみか、遂に多少裂けなど致したらば、蠟膏藥と軟豚油とを程好く混じたるを布に塗り之を當つべし。
又た、姙婦は、歯の痛むとあり、其痛みに堪へがたくして、急に之を脫かせたしと思ふものもあれども、之は、宜しからず、懷姙中に、歯を脫き、其の爲めに、出産の節、大に困難を受るものあり、之は、尤も心得置かでは、適ハぬとなり。若し、歯

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

が痛むならば、綿糸を丁子油もしくはクロロホルムに浸し、之を歯の痛む邊に押し當て、置き、而して、度々之を取代ゆべし。此時ケレヲソートを用ゆるものあれども、吾人の聞く所ろに由れば、之は甚はだ宜しからぬと承はる、即はち、其効にて、痛む所ろの歯をば、暫時止め得たりとも、之が爲めに、其歯の全躰を殺ろし、遂に全く其歯を損するに至るとあるなり。其のみか、或る醫者の説によれば、ケレヲソートを以て歯の痛みを直はしたるものが、其毒段々に廣ろがりて、不幸にも、遂に死去したるものありとぞ。但し歯の痛みは、胃に不消化を起し、腸に故障あるよりして起るとの甚はだ多きものなれば、先づ、通じを能くして、腸胃を

三二

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

調うるを宜しとす、左れば、多くの歯痛みは、大抵直はるものなり。又た歯痛を治する一つの方法に、パンを砕き、之を五分間熱湯に浸したるものを、口中に含みて、頬と歯グキとの間に置くべし。之にても、尚は治まらずは、鳶色西洋紙を、手の掌ほどに切り、之をブランデーに浸し、尚は黒胡椒をまぶしたるを、頬の上よりして、恰かも傷たむ所ろへ張りて、數時間すべし、稍や治まるべし、但し之にても尚は効なくば、同樣にして生姜を用ゆべし。

即ハち、生姜の粉に、水を、滴々落とし乍ら、能く之を溶きたるものを張るなり。

尚は、又た、別に歯の質に變ハりなくして、而も、甚ハだ痛み

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

を覺え、顏なども、神經的に痛く感ぜらるゝようの時は、

硫酸キニーネ　二十四グレーン

鳩阿兒利精　六グレーン

糖蜜　適宜

之を合ハせて、十二の丸藥とし、一日に三度づゝ一粒を服すべし

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○和畫講義

第一節

八木兼辰述

繪畫の効甚だ廣く且大なり外ハ堂宇屏障漆器陶器に畫き金石竹木等に彫り内は看視を精しくし思想を深くし意匠を巧ならしむ蓋し本邦の繪事上世に創ると雖も草木の花葉蔓卯雲霞の類にして人物鳥獸等甚だ稀なり中世百濟支那の畫本邦に傳り繪畫大に開らけ其技に巧なる者續々輩出し別に本邦畫流の一大家を起し終に光榮を海外に博し彼の各國に於て日本固有のものとなすに至れり然るに本邦に於てハ其道漸く衰へ古法殆ど湮滅せんとするに至れり其因て來る處時勢の然らしむるものと雖も近世ょ至て一ハ支那南宗の一流(文人畫と稱するもの)大に流行し甚だしきに至てハ芋に似たる石葱に類する蘭を畫き落欵の書式をも辨知せず漫に自ら文人畫家と稱し風流とか風雅とかの名を藉て其技を售り世間の人亦誤つて高尚の畫と認めて之を愛玩す随て陶器漆器等の畫も自然時流に走り古法愈よ本邦に衰へ海外に榮譽を得るに至る抑も畫は形在て而して後諸法講すべし今試に月を畫て指さし問も誰も之を鼈と云んや然れども其光榮を海外に博するものは只に形の似たるのみならず筆墨の妙氣運生動人をして嘆賞せしむるに至ればなり加之畫は文字

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

にても言語よても盡しがたきものを盡さしむるものにて文字にては花の紅白は紅白と書き鳥の飛を飛ぶと云ふに止まり花の美麗鳥の飛鳴人の肥瘦喜怒哀樂山水四時の變異畫に非れば盡す能はず又久敷別れし友世になき人などの遺書を讀て既往を思ひ起すより共に遊び同じく談せし景狀を畫に見る時は過去の狀胸間に生じ愛慕自から禁すべからざるに至る幼稚の時橋辨慶や大江山征伐の畫を見て成人の後目を閉ちて思起せば忽ち大坊主が鉢卷して七つ道具を背負ひ十二三歲の稚子髷童子が下駄ばきにて小太刀と大薙刀にて鬪を見る又大江山の事を思へば源賴光渡邊綱坂田金時など山伏裝束にて現出すかくの如く幾百年前見ず知ずの人にても其心情まで思想し得べし又意匠の巧を要するものは總て其色其形肖たりと雖も意匠の巧拙に依り畫に死活を來し看者の感情深淺に關す今玆に一例を擧れば一日谷文晁の門人相集つて翁の畫才を試みんとて秋の七草の畫を寄合書に作し全紙餘白を留めず殆ど筆を下すべき地なからしめ最後に翁に筆を染むることを乞ひしに翁直に大平筆を取り紙面の中央に淡墨を塗抹すると見えしが忽然滿月雲烟の中に現れ野花秋草皆濕ひ一段の爽氣人を壓するの致あり滿坐の人意匠の外に出るに驚嘆す（東洋繪畫叢誌第五集）意匠の如きは獨り繪畫のみにあらず學術上に於ても事を處する間に於

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ても忽諸に附すべからざるなり。

第二節

畫に六つの法あり氣運生動、骨法用筆、應物寫形、隨類傳彩、經營位置、此中氣運生動は以下五つのもの皆備て然して後漸くに至るへし右ぎ六つのものを以て畫の綱領とあす今其骨法用意、應物寫形の一端をいはんに余嚢に畫の用は漆器陶器に畫き金石竹木等に彫る事を曰しが茲に肝要ある事は總て物の模樣と畫とは分別せざる可らず然るにまゝ相混ずる者あり模樣に畫を混ずるは宜き者あれども（唐草又は綾錦形の中に花鳥禽獸人物山水等を畫ける者は模樣中に畫を混ずるもの）畫の模樣を混ずるは甚忌むべきヿ模樣は大底骨法用筆あく氣運生動なく畢竟物品の裝飾に外あらざるヿ畫は是に異なり柳綠花紅鶯囀蝶舞の趣を見て忽ち春ののどかなる情を動し枯蘆宿鴈の圖を見て頓に淋しき秋の思を生し戰場の有樣を見れば英氣を發し地獄の景狀を見れば恐懼を抱くは皆骨法用筆の力と應物寫形の妙とにいづ模樣の效焉ぞこゝに至るべけんや畫に於ては寫形と筆力と少らくも相はなる可らず畫家渡邊華山翁畫の傍ら蘭學に通じ曾て曰ふ凡そ畫は實物に規矩して而後意を寫すべし然らざれば動物は骨格に疎く花卉は精彩に乏し故に余蘭畫に於て力を得

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たる事頗る多し是翁が他人（畫家粉本とて新古名家の圖を寫し以て模本となすしかれども取次傳寫の間儘誤寫を傳ふるあり）により誤を模する如き弊至て稀なり（東洋繪畫叢誌）余曾て神戸に在て某氏を訪て西洋に送る所の屛風畫幅を見るに衆鳥百花滿面に燦然として殆ど地なきが如し又數幅を掛く其圖位置落款總て尋常畫幅に異なる事なし余問て曰ふ西洋に輸出する畫は大底先に見る所の如し然るに後の見る所ろのものは吾國にて愛玩する所ろのものと更に異なる事なし主人笑て曰ふ西洋とても仕入屋もあれば愛藏家もあり然るに畫家に西洋輸りの畫を囑すれば皆先の如く畫けり先きのものは即ち仕入畫にして筆者の勞甚だ多くして其價甚だ卑し後のものは勞少して却て直ひ貴し是即ち先のものは模樣に近く後のものは十分に意を寫したればなり余竊かに思ふ媒商の利は却て先に見る所ろの仕入畫に多きか。

第三節

余嚢に外國人の吾國の畫を愛する事をのべしが今其一二を擧るに去る頃京都に滯留せし墺國領事「シエオルーフヒユトーチロキ」氏が或骨董家の店頭に土佐家の描きたる大内裏京都市中並に平清盛館の圖の古屛風を見附け一々質問したる上金七拾圓にて買取或

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

人に語りて曰豫てより日本國大内裏の事を噂し居たるに今此の圖の見當りしは幸なればば直に本國へ廻送し同皇帝に献上する筈なりと(東洋繪畫叢誌)余今茲七月日光に至り徳川將軍内殿の唐木集木戸の彫刻を見るに樹石の向背禽獸の形勢一草一木骨法用筆の妙歷〻見るべし因て此事を神官に語りしに神官曰さもあるべし其原本皆有名の筆あり或西洋人深く是れを歎賞して直を論ぜず是非購求せん事を乞て止まず神官曰これは吾國無二の品なればは直を以て賣却する事は叶はす交易なればは相談致すへくとの答に西洋人も大に喜び然らば何を以て交易せんといひしに貴國を以て是にかへんといひければ西洋人嗤て去りしと外國人の吾國の畫を愛する事かくの如し畫は故實に據るか又は事實によるか或は古人の圖に倣か然らざればは誤ちを寫す事多し此佗に畫中變異合理、狂怪求理の二法は其人の才不才に係る事尤も多し嵩谷一雄頼政鵺を射る圖の額を淺草觀音堂に懸け潛に群集の中に紛れて人の之を品評するを聞くに一人曰平家物語に猪の早太九刀ぞ反たりけるとあり此畫は刀を閃めかし高く頭に過ぐ木文に合はざるに似たり嵩谷素より本書を見すして漫然圖を作りたるを慙悔し直に削り改て畫きしと今存するもの是なり圓山應擧嘗て京都智恩院の衝立に(一に額ともいふ)粛に鶏を畫き身を潛めて衆人の評を聞きしに或一人鶏は四季に隨て

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

羽毛の變るものあるに菊花の時候と鷄の氣候相違せりと曰ふをきゝて其人の跡を追て聞けれハ小鳥商人にて畫の事實に異ある事を悉敷談せしにより直に改めたりと此二つの話しハ相似たる事なれども一ハ故實に暗く一ハ實際に疎きによる余先年但馬國森村大聖寺に藏せる應擧の龍虎對幅の龍其眼睛の位置勢の後邊に附けり之を僧に問へども詳かならず今茲日光にて見たる探幽の龍（世に八方睨といふ）其眼睛曩に見たる應擧の點眼に少しも違はず茲に於て應擧の古人に據て苟もせざるを感ず又谷文晁昔時某侯の席上にて富士越の虎を（富士越の龍ハ畫家の多く畫くところ）需められ沈思良久して童子が虎の繪ある紙鳶を飛はす圖を作り遠景に富士を添へけれハ侯ハ手を拍て翁の畫才非凡なる事を嘆美せられたりと（東洋繪畫叢誌）是等ハ所謂變異合理狂怪求理の一端ともいふ可きか

第四節

變異合理狂怪求理の外に繪空事といふ事あり曩に言へる故實や實事なき事を畫がいて却て趣を幽にし或は人情に適はしむるなり然れども是又甚だ難事にして凡筆の得べきところにあらず圓山應擧嘗て防火の効に報ゆる爲防火丁某の幽靈を背に畫かん事を乞て止まざるによりよぎなく筆をとりて畫きけれバ某大に喜て刺繡となし其悽怨悲愴の狀さなが

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ら言わんとするが如きにより噂さ高くありたれども己は是を見る事あたはず佗日祇園祭禮の時寳鏡中に怨靈の現れたるを視て大に驚きよく〳〵見れば己の背の刺繍ありそれより心憶して其夜なにとなく心地悪しくあり魘わるゝ事甚しく終に物狂わしき擧動をなせり或寺の僧此事を聞て針持てかの幽靈の面部を悉く衝きつぶし大なる鏡に之をうつしけれは某見て大ゐ安堵し後魘わるゝ事なく病も愈しとぞ（東洋繪畫叢誌）いかに應擧が寫生の名人だとて幽靈が私を寫せといふて來そうな事もなし加之世間幽靈の事は大底相似たる噺にして實際有る樣にも信ぜられず然るに此樣の現況を與へしはいかにも不可思議の事なり如此奇妙はさしをき他の幽靈とても其出所は柳の下か荒はてたる墓所にかぎる間じけれとも若し松の下に拳を振揚て立つか西洋造りの家へ洋服靴履きにては甚だ不似合なるべしやはり柳の下か墓所で半身を現し兩手を垂れて立たねば凄慘悲怨の情が見へず是等は即ち所謂繪そら事なれども物に就て情を寫すは畫の活法なり又小督彈琴の圖とて古き茅屋の内に一人の宮女月に乘じて琴を調へ籬の外に烏帽子狩衣の官人馬上に笛を吹き奥床しく寫せるは平家物語等の書に小督は「高倉天皇の宮女にして容貌麗しく且つ能く琴を彈くを以て 帝の寵愛淺からざりしが平 淸盛己が女を以て中宮となしてよ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り小督を忌み害を加へんとすときに宮中を逃れ出で知るべを尋ね嵯峨野の奥に隱れしに又あらわれては如何なる憂目に遭も計られずとて明日大原に去て尼とならんと覺悟を定め今夜限りの名殘りにと彈き馴れし琴を取出し想夫戀の一曲を調たり時しも八月十五夜にて　帝は月に對し常よ思ひ絶せぬ小督の事を思出され宿直せる中宮大夫仲國を召し一通の御書と御服とを出し賜ひ彼を尋ね渡せよとて御寮の馬を賜はりたり仲國は風に聞嵯峨野わたりを尋ぬるに木立の中より琴の音漏出で丶其調べ曾て宴に侍り笛を吹きしとき小督が合奏せし爪音に彷彿たれば是なんその隱家なるべしと窺見るに中より一侍女の出て之を制せしをも聞かず直に片板戸押開き御書と御服を參らせ　帝の御言をも傳へ其返書を携へ歸りて之を奏し又重て迎に行きて宮中に伴ひける其后此事清盛の耳に入り小督は追放されたり之に依て是を觀れは屋内の琴と馬上の笛と相和する趣を畫きしは宮中と嵯峨野とを湊合して一となせしものなり(東洋繪畫叢誌)是等は故實とは相違あれども大に其感情を深くするの高趣向なりといふべし

第五節

學畫者最も其心思を清潔にし其品行を正しうせざるべからず若其人の心淸からず行ひ正

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

しからざれバ假令其畵ハ巧なるとも固より貴ぶに足らざるなり然して畵所の神佛聖賢高士等に對ても亦自から恥ずべきなり古より大よ世に貴ぶ所の畵ハ其筆する者忠臣か孝子か義士か高僧か貞女か或ハ卓越の人畵に隱れて世事を事とせずして思操淸潔品行方正ならざるハなし(時流に因つて一時名を博するもの丶外)今諸愛姉に向つて一例を擧ん池の大雅の妻玉瀾名ハ町といふ者あり幕府士人某の女なり性敏慧澹泊其孝貞世の知所あり大雅の技倆人敢て知る者なし家甚貧窮自ら扇を畵て賣んと欲す到處買者なし大雅之を湖に投て歸る玉瀾以て意となさず嘗て柳澤淇園に就て畵を學ひ夫妻書畵を作て樂み時ありて大雅三線を彈ずれバ玉瀾琴を鼓して和し釜甑塵を生ずるも亦敢て意となさず尋常の婦女をして玆處せしめバ之を何とか言ん偶士人關東より來る大雅在らざるを以て玉瀾出で接す士人ハ即ち玉瀾の同父異母兄弟にして棠棣の情を盡さんといふ玉瀾亡母の遺言を守り通問を辭す後大雅の名海內に轟き玉瀾も亦之に齊うす然れども素樸澹泊貧時に異ならず其畵筆力淸逸氣韻尤高し即其氣質の自から筆端に露わる丶なるへし本邦の女人の畵を言ふ必ず女史を以て先づ指を屈す繪事の衰うるに隨ひ稍や末技に屬し古人の精神を凝し意匠を煉り其蘊奥を極むるもの殆と稀なり近世に至て多くハ席上の戲毫甚し

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

きハ則ち酒場の下物に代ふ誠に嘆息の至りなり椿山翁の如きハ常に袴を着して筆をとる宜なる哉絶て漫然の跡を見ず支那人の畫ハ無聲の詩といふ如く其情の筆端に露ハるれハ初學の時務て沈思して一意規矩を要し軽卒揮拂すべからず然らざれバ手筆を揮ひ心佗事を思ひ或ハ惰氣を生じ徒らに紙墨を費し而して卒に板刻結の病に陥る(用筆に三病あり一に曰く板板ハ腕よわく筆にぶくして働に力とぼしき故に篇板枯燥圓混なる能わず二に曰く刻刻ハ運筆中疑を生じ心の欲する如く筆隨ふ能ハず初より意匠になき事を漫に點鈎して燥裂浮薄ならしむ三に曰く結結もやはり心と手と相戻り滯礙して流暢なる能ハず)之を避るの法ハ沉芥曰く意筆の先にあり趣き筆を以て傳又曰凡筆を下すハ常に氣を以て主とす氣到ハ則力到る初學の人先沉默靜思)雜慮を退け心專ら繪事を思ふ簡短なる默禱をなし而して後筆を把を要す

地球ハ混然たる一塊物にして固より定則なきものゝ如くなれども是を細別する時ハ極て細小の草木蟲類に至るまで自然の規則あり蝶の菜花に戯れ蟬の緑樹に吟じ蟋蟀の堂に鳴き福壽草や水仙の咲き初むるハ四季の規則あり今日の如く種々の機械の開けざる前一丁字を知らぬ農夫星や雲を見て農事を治むる如きハ所謂る物あれバ法りあるなり畫も亦字

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

宙間の物心に得て筆端に發する混然たる法なく流なき物の如くなれども森羅万象既ゝ筆端に上ぼれバ法則自然に其中に備り其道の開くるに随ひ法、則ち定る其後或ハ地氣に感じ或ハ風俗人情に随ひ或ハ稟賦の性に依り宗派と稱するもの創て定る支那にてハ唐の時に南北兩宗分れ日本にてハ巨勢金岡（今を距る大約九百九十六年法を支那に取り一派を開く）春日基光（土佐流の始宗今を距大約八百九十年）狩野正信（狩野流の始宗今を距る四百卅四年）圓山應擧（寫生派始宗今を距大約百年）あり是等の宗派を學ふ人自ら學ふ所の派を尊ひ浮世繪（市畫といふ）などを見ハ甚だいやしむの風あれども其見の狭のみならず畵道に疎きに似たり土佐狩野寫生支那南北各長ずる所あり土佐の宮殿に於る狩野の人物に於る圓山の花鳥に於南北兩派の山水四君子に於る如く浮世繪の時世風俗を寫すに長じたれバ是を以て當時の故風を徵し現今の景狀を向來に傳るに缺く可からざる一派なり即ち風俗の寫眞にして寧ろ尊ぶ可くも卑やしむ可からず殊に近來の如き內外人雜居の時に當て衆人群集の畵を後世より徵するに是を以て粉本となし各派の筆意を以て畵く時ハ古の繪卷物の如きも容易になし得べきなり凡何派を問はず其師の長ずる所を知らず先づ其癖を傚ふハ獨り畵のみに非ざれども別て畵ハ形を作るものなるが故に此弊に陥り

易し一度陥る時ハ自から善き様に思ひまねびたる先入なるが故に容易に脱し難し菊池容齋翁ハ其師の敎諭に曰く人各稟る所の性同じからず故に筆力自から强弱あり强必ず巧に非ず弱必ず拙に非ず好む所ろも亦自から別わればハ余の畵風に意を止めず自からの風を工夫して畵く事に心を用ゆべし後自得する事あるべしと（東洋繪畵叢誌）是即ち古人曰ふ所ろ師學捨短るものあり學者唯己の學ぶ所の畵風のみに拘泥して他の長所を知らざればバ窪花籠鳥の譏を免かれさるべし

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

日月星日々の出現の事

日の出沒に由て起る出來事の事

○地文學講義

第三回　晝夜

今ま、天に臨む日輪は、日々東より、出で、西に入り、何如に雨降り風暴るゝ時と雖ども、尚は雲間に照る、而して、夜に入れば、月、又星、黑幕の間だに現はれ、四方暗々たる下界に、銀ねの光を發す、斯て、日輪は、年中毎日必らず出で、月星は、三百六十五日、多くは代るゝ顏を見す、抑も、如斯く止みなく、運轉出沒するハ、抑も何如なる力のありての事か。

扨て、又た、日輪の現はれて在る時ハ、氣候甚ハだ温かなり、然れど、雲あつて之を隱くすときハ、則ハち甚ハだ冷やかなるを覺ゆるなり、又た、晝の間だは、日輪の出づるが故に、

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

古の人の考の事

天地に光明あれども、夜ると成つて、日輪すでに地下に沒すれバ光明滅し、四方暗黑となる、此故に、世間の光明と温熱とは、其元と日輪より起り來るが如し、左れバ、此の世界の上に現はるゝ色々の出來事を承知する所には、先づ我が地球と、彼の日輪即はち太陽との間だに存する關係を、承知せざる可らず。

抑も、太古の人間は、恰かも我々の子供の時と同じく、只だ目に見る所ろを以て、其儘に信用するの習慣なりしとなるが彼の太陽月星を見て考へたる趣も、亦た斯の如し、即はち、此の日月星は、日々夜々世界の周圍を迴はり行き、恰かも我々のぐるりを旅行するものゝ如しとは思ひぬ、左

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

地球廻轉の事

れば、日の出、日の入などの語ばを遺して、專ら其物が自身と出沒ずるものと考へたり。

然るに、最早や、今日と相成ては、斯樣なる子供らしき考を持るものはあらず、吾が地球は、天地間に存する只だ一つの少き星の如きものにて、此外に、數知らぬ程の多くの星あり、但し、此の地球は、太陽即ち、多くの遊星を取まかせて眞中に安んじ居る所ろの大いなる日輪の周圍を周り行くものにて、丁度昔しの考へと全く反對と成りたり、之は、決して漠然たる想像の說にてはあらず、若し晝と夜とが代る〲出で來る樣子を思ひ見れば、必らずや、地球が太陽の周圍を運行すべきものとは知らるべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

晝夜の出來る譯の事

今ま、茲に、一つの圓ろき球を取出し、ラムプの前に持ち行きて、之を緩やかに廻はし試ろみるに、球の一面は、光りに當つて明るく、其の半面は、全く陰と成りて暗かるべし、而して、此の球を段々と廻はし行くに、先きに暗かりし所ろ、此度は明るく成り、先きに明るかりし所ろ、此度は暗らく成り行くべし、之れ即はち、地球が太陽に對するの景況を例示するものにて、晝夜の分るゝは、必竟斯の如き有様にて生ずるものとす、蓋し、地球は、日々一度づゝ廻轉し、廻轉し乍ら、太陽の周りを周轉するものなり、故に、先づ、地球を丸ろき一つの球とすれば、此の球の上より下へ眞直なる軸を突き通したりと假定すべし、即はち、此の突通りたる

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

軸を中心として、日々回轉するものなり、左れば、學問上にて、此の軸を、回轉軸と稱し、軸の上、即はち、北に當る所ろを北極と名づけ、軸の下即ハち南に當る所ろを、南極と名づくるものなり。

吾々が日々に實見するところは、太陽が東に登りて、西に入るが如し、之は即はち、地球が日々西より東へ向けて回轉するが故に、扨ては、太陽が朝たに東より登る如くに見ゆるとなり、斯て眞晝と成り、太陽が吾々の頭上に懸る迄は、段々と上に登る如く見ゆれば、即ち、日が上ると稱し、之より、又段々と、下に降るが如く見ゆれば、俗に即はち、日が入るとは稱するとなり、然れども、其實は、くれ〴〵も、太陽

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

地球の廻轉周轉の事

が上下するにあらずして、地球が廻轉するとと知るべきものなり。

扨て、地球は、日々斯の如くして、太陽の面前に於て廻轉す、之は、一廻轉に、丁度二十四時間を要するの割なるが、此外に前にも申したる如く、太陽の周圍を一めぐりするとあり、之は、前に云へる廻轉をし乍ら、三百六十五日即ハち一年の間に、漸やく爲し畢る所の遠き旅路なりとす但し、太陽の周圍を一周する此の旅路の道は、凡そ九千二百八十万英里(三千八百〇貳万千九百五十八里)なりと云ふ、之を僅かに一年にて走り行くとすれば、地球の走り行くとの速やかなるは、實に驚くべきものなり。

五二

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

斯の如く、地球は、一廻轉毎に、晝夜を爲し一周轉毎に、一年を爲す、左れば、地球全躰は、一つの大いなる時計の如きものと云ふべき哉。

第四回　空氣

第一章　空氣は何物ぞ

空氣の存在する事

吾々の周圍を見廻はして、先づ最初に考へ付くべきものは、即ハち、空氣の事なり、抑も空氣とは、目にも見へず、鼻にても嗅ぐとの出來ざるものにてハあれども、其の人生に關係する所ろ、實に至重至大なるものなり、由て、第一に空氣の此の四方に存在するとを確知せんとには、手を動かして見るに如かず、何んとなく、手に觸るゝ所ろの氣ある

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を覺えん、扨て、又た、扇を取出して、試みに、少しくあほぎて見るべし、乍ちにして、微かなる風を起さん、之れ即はち、目には見へず、鼻にては嗅ぐと能はざれども、確かに茲に一つの存する所ろのものあるの確證ならずや、左れば此の空氣時に少しく動いて、微風となり、或は急に動いて暴風と爲る、又或る時は、温められ、或る時は冷やされて、以て天地を暑くも寒くもし、或は、又た、清淨と爲つて天氣晴れ、又た不潔暗曇と爲つて、天氣を暗らくするようの事あり、之れ、何れも皆な茲に存する所の空氣なるものあるが故に、出で來る所のものゝ也。而して、此の空氣は、地球の表面の何の所ろにも存在し曾

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

空氣の存する限の事

て在らざる所ろなし、吾々此の間たより離れ去らんとするも、得べからず、凡そ、地球の表面より上の方、二十里ほどの間だは、悉く此の空氣を以て包まるゝものと云ふべし、左れば、學問上にて、此の空氣ある限りを、雰圍氣の存する所ろと稱し、此の氣の存せざる所ろを空虛とハ云ふなり。

空氣の成分の事

空氣とは、抑も何如なるものより成立つ乎、之は化學と云へる學問によつて、研究するとなるが、主もに、酸素窒素と云へる、二つの原素より成れるとを知るなり、而して、此の主なる二原素の外に、又た水蒸氣もあり、炭酸瓦斯もあり、尚は亦た、いろ／＼の目に見へがたき程の微かなる塵ゴ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ミの類をも、之に混じて居ると也。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

熱の傳ハり行く事

○家内理學　（第六回）

第五章　温熱を導く事

扨て又た、温熱の傳ハり行く事を述べんに、今ま茲に火箸の長きを取つて、火中に挿し入るれば、其のサキは、非常に熱すべし、然るに、其熱するは、啻にサキの一端のみならず、之を久しく挿し入れて置けバ、其熱段々と傳ハり來りて、遂には、火箸を悉く熱すべし、抑も、此の火箸の火に觸るゝ所ろは只だ其のサキの一端なれども、此の一端より火力の傳ハるが故に、則ハち、全躰をバ熱するなり。更らに明白なる一つの例を擧れば、此の火箸に蠟を塗りて、其の端を燈火に當てゝ見るべし、暫時相待つうちに、火力漸やく傳

熱を傳うるに速き遲きある事

ハりて、蠟段々に溶け、滴々として下に落つるに至るべし、之れ即ハち、一點に火を當てたるが、其の熱やうやくにして、全躰に傳ハり行くものと知るべし。

然るに、之は、鐵を以て造りたる火箸を用ひての試驗なりき、依つて今ま、復た試みの爲め、何かガラスにて造りたる管の如きものあらば、(娘方のビイドロの簪の足など尤も宜ろし)之に、前の如く蠟を塗りて、再たび彼の燈火に當てゝ見るべし、成程、久しく相待ちたらば、蠟ハ追々と溶けて來れども、其溶くると、甚ハだ遲く、中々火箸に附けたる時の樣には參りがたし、之れは何故なりや。但し、今ま、一つの外の致し方にて、其證據を申さんに、茲に釘一本あると、定

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

め、其釘を指にて持ち之を彼の燈火に當てゝ見るに、暫らくにして、釘の全躰熱して、非常にアツク成り、迚も指にて保ち難きに至るべし、然るに若し前のガラスの管を、此の釘程の長さにして、之を同じく指にて持ち、彼の燈火に當てゝ見るに、餘程久しく持つて居る中にも、尚ほ熱しと覺へず、前の釘の如く、暫時にして之を手離すようの事はあるまじきなり、右の如く釘を持ちたるときと、ガラスの管を持ちたる時と同じ火に當てゝ居り乍ら、指に感ぞる熱度の相違するハ何故なりや。右二つの試驗ハ、即ハち同樣の理由を示すものにて、必竟、火箸に致せ、釘に致せ、其の鐵を以て造りたるものは、火の熱を傳うると速く、彼のガラ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

熱を傳うるに遲速ある由縁の事

スの如きものハ熱を傳うると甚ハだ遲きが故にてあるなり。斯様に或る物は熱を傳うると速くして、或る物は甚ハだ遲しと云ふ即ハち、其物の性質によつて相違するとなるが故に、學問上にて、一つを能く熱を傳うるものと云ひ、他を惡しく熱を傳うるものと云ふなり。

然るに、何如なる物品は、熱を傳うると速くして、何如なるものが遲きやと云ふに、凡そ、其質の緻密なるものハ、大抵其の速き方に屬し、質の軟らかなる、粗なる如きものは、即ハち其の遲き方に屬するように思ハる、前の實例に就て申すに、鐵は、ガラスよりも質の緻密なるものなれば、即ハち、其熱を傳うるとの、那の如く速やかなりしと也。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

色々の物品に熱を傳うるに多少ある事

此故に、ラムホルドと云へる學者は、右の一條を基ひとして、色々の物品の熱を傳うる力の多少を考え、其の力の多きものより、少なきものへと下りて、左の如く種々の物品を列らべたり、即ち、

金。銀。銅。鐵。亞鉛。錫。鉛。ガラス。大理石。

陶器。粘土。木質。脂又は油。雪。空氣。絹。木灰。

木炭。草綿。油煙。毛織。粗絹。毛皮。

右の一表を實用する心得の事

左れば、右の一表を心に記臆して置かんに、實際に臨みて、色々の便利あるべし、例へば、綿は、毛織よりも、熱を傳うるとの速やかなるもののゆゑ、冬嚴寒の頃ろ、綿にて造りたる木綿の着物を着れば、毛織の衣物を着けたるよりは、躰温

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を外に傳は行きて、爲めに身躰を冷やかにし、決局其身に寒さを感ずるの度大ひなるが如し。左れば茲に嚴寒にあたり、野菜を保護して、寒さを防がんとするに、木炭の粉を振りたるが好きか、又は、木灰を散らしたるが善きか判斷の分らざる時にても此の一表を見て、木灰の方が、熱を傳うると多しとあれば、即はち、木炭の粉の方が宜しきとと承知せらるべし、又た温かなる御馳走を入れ置き、之を冷却さじと思ふとき、鐵の鍋に入れ置くべきか、又は錫の器に入れ置くべきか、是又判斷の附かぬ時は、右の一表によつて、錫の方が、熱を傳うると少なしと悟り、即はち、錫の入物に之を盛ると云へる決心を得べし。然るに、之は、温かさ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

自然界に此規則の行れ居る事

を冷却さじと云へる時の事なれども、之と恰かも反對にて物を早く煮るときの心得は、如何ん、躰だを速やかに温たむるの工夫は、如何んと云ふに、丁度前と反對の心得を保ち、鐵の鍋は、錫の鍋よりも、物が早く煮ゆべし、鉛の器は、ガラスの瓶よりも早く熱を受くべし、なんど云へるように承知せらるゝとなり。

扨て、此の世の中に於て、造化の爲し玉ふ所ろを見るに、眞に驚服の至りと思ハるゝもの甚ハだ多し、先づ、冬は寒くして、草木に至るまで嚴しく冷え渡るが故に、雪と云へる、熱を傳うるとの最も少なきものを降らせて、下界を保護し玉ひ、鳥類には、羽の如く、獸類には毛の如き、是れ亦た熱

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を傳うるとの甚だ少なきものを與へて其躰の温かさを保護せしめ玉ひ、樹木には、表面に、皮の如き質粗らくして熱を傳うるとの薄きものを附け置ひて、又々同様に其樹の温度を保たしめ玉ふなど、何れも皆な、前に記したる規則を自から行ひ玉ふ所ろと云ふべし。

此故に、人間が家屋の如き者を建築する時に當りても、亦た是れ右の規則に注意して、其の建築材を擇ぶべき筈なり思ふに、家屋を造るべき材料は、熱を傳うるとの成べく少きものが宜しからん、即はち、冬は、家の内にて燒きたる爐の火熱を、外に持ち去らず、夏は、炎々たる屋外の暑さを、内に持ち來らず、双方ともに、無關係にして、之を傳うると

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の甚だ薄きようなる材料が尤も宜しきとと信ぜらる。然らば、右ようの材料は、何如なるものぞと問ふに、ハッチンソンと云へる學士は、石版の熱を傳うる力を、百と假定して、扨て、外の色々の物品の傳熱力を、次第に分ち、左の如き表を造りたり、

石版	一〇〇
大理石	七五乃至五八
煉化石（乾製）	六二
同（燒製）	六〇
檞樹	三四
條板と石膏	二五

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

石膏　二〇
石膏及砂　一八

右の如し、而して、硬き材木は、軟かき材木よりも、傳熱力多く、生まの樹は、乾きたる木よりも多しと云へり、左れば、若し、戸障子の造り方をさへ注意したらば、木造の家は、彼の煉化石づくりの家よりも、遥かに宜しかるべし、況んや、特に更らに大理石などにて造るものは、經濟上に於て何の効能もあらざるものと知るべし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

女學雜誌社出版書目

船越鼎太郎君著 産婦小兒 **攝生法** 定價十八錢 郵稅四錢

鈴木弘恭大人著述○小中村清矩大人評 改正増補 **文法口授** 定價十八錢 郵稅四錢

横山雅男君著 **婚姻論** 定價三十五錢 郵稅十四錢

巖本善治編 **木村鐙子小傳** 定價十錢 郵稅六錢

中島湘烟女史著 **善惡の岐** 定價五十錢

發兌 東京京橋區日吉町八番地 **女學雜誌社**

女學雜誌 第九十二號 明治廿一年一月十四日發

●社説世話俗言の勢力、及び、女流自重の必要●論説生意氣の説(鈴木券太郎)○衛生のこうのう(加藤弘之)●批評國學和歌改良論○詩人の春●叢話謙遜の説○東[illegible]人嬌風會○一月の衛生(荻野ぎん)○米國婦人禁酒會●小説奔彪榮華の夢(花賣娘)○白蓮談(女の學者にも困る〳〵)●佳傳ブラッセー夫人○モラタ●寄書中島俊子の詩○愛他心の詩附●新報二十五件

女學雜誌 第九十三號 明治廿一年一月廿一日發

●社説姉妹の爲に慷歎す●論説品行論(加藤弘之)○生意氣の説(鈴木券太郎)●叢話女と云ふ文字の解(鈴木弘恭)○現今日本の婦人(雪江女史)○謙遜の説第二●小説奔彪榮華の夢(花賣娘の二)●佳傳ホウシ夫人○マダムイリサベス●寄書新年の祝詞(神田順)○閉校式の文(飯島茂)●新報三十五件

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●六合雜誌 第八十五號明治廿一年一月十六日發行

目次●良心の本源(原田助)○婦人の位置を高くする事(ゴルドン)○經濟新論を評す(伴直之助)○五官及基督敎(デフヲレスト)○日本歷史學(高橋五郎)○有神證據問答(續)○未來保守黨の射影(竹越與三郎)○宗敎哲學上(小崎弘道)○雜記沙漠の花批評○心理學上の新問題○廣告

每月一回發行一冊定價十錢

●基督教新聞 第二百三十四號明治廿一年一月十八日發行

目次●世事評論○明治廿年重要記事(終)●基督敎新聞○靑年の基督敎●敎報○十數件●論說○[illegible]を救ふの必要●說敎○堅固及び勤勞●雜錄[illegible]敎者の秘訣●雜報及廣告

每週發兌一冊金三錢府外郵稅一錢

發行所 東京京橋區日吉町廿番地 警醒社

勝安房君題
津田仙君著

酒の害 全

一冊定價郵稅共金拾錢●四冊以下一冊に付き仝前●五冊以上十冊以下一冊に付き割引價五錢(但遞送料は別に申受く)●百冊以下一冊に付割引價四錢(仝前)●百冊以上一冊に付き割引價三錢(仝前)

右第一版千五百部は一週間內に賣盡し候よ付第二版出來候間續々御注文被下度候

出版 東京 婦人矯風會

右事務所 女學雜誌社

賣捌 東京麻布區本村町 學農社雜誌局

東京京橋區日吉町 警醒社

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

發行人兼編輯人 巖本善治

印刷 森田豐

遞信省認可

東京秀英舍印行

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY